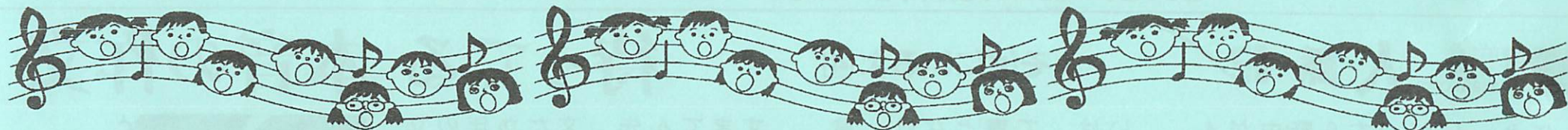


3.11後の子どもたち、教師たちは、どう生き、どう育っているのだろうか？



研究所第7回学習会

日時：2013年2月2日(土)

午後1時30分から、4時30分まで

会場：静岡市「ふしみやビル」7階・401会議室

(静岡市葵区呉服町2-3-1 TEL:054-272-8567)

JR静岡駅から北へ、呉服町通りを徒歩で大凡12分程度です。

テーマ：学校を地域と人間の再興の場に！

～震災を通して学ぶ、地域に根ざし、つながり合う実践を～

講師：制野 俊弘 さん (制野先生ご本人の自己紹介から)

1966年、宮城県東松島市(旧矢本町)生。宮城教育大を卒業後、これまで24年間中学校に勤務。現在は東松島市立鳴瀬第二中学校に勤務。学校体育研究同志会に所属。同志会以外では全生研や日本作文の会などの実践を学んでいます。

私たちは、昨年(2012年)2月に、福島県会津民研・所長の斎藤民部さんを招いて、3.11・福島原発問題について、特に“原子力や放射能のことを子どもたちにどう教えていくか”を学習しました。

今年は、3.11から凡そ2年、震災から何を学ぶのかを問いつづけながら、地域に根ざしてつながり合う実践を、子どもたちと共に取り組む、宮城・東松島市の中学校教師、制野俊弘先生をお招きして学び合いたいと思います。

制野先生は、地震、津波、避難生活という未曾有の体験を経ながら、学校を骨組みから創り直すという未知の経験を、子どもたちと共に取り組んできました。

多忙・過労の日常を乗り越えて、困難の中から様々な活動を創り出し、地域と人間を豊かに復興させていく実践の一端をお話いただき、沢山のことを学んでいけたらと思います。そして、私たちの明日に活かしていくことが出来たらと思います。

お忙しい時期ではありますが、周りのお仲間も誘い合って、ぜひ、ご参加願えればと思います。



制野俊弘先生の実践が、「朝日新聞」(10月17日・水)で紹介されました。

『制野俊弘先生の講演会』は、2013年2月2日(土)13:30~16:30、静岡市「ふしみやびん」7階です。

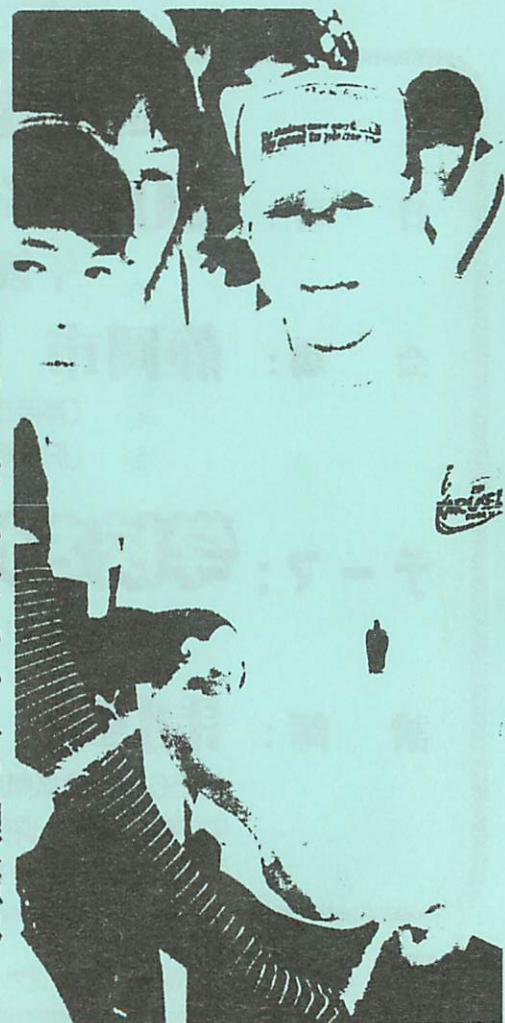
2012年(平成24年)10月17日 水曜日 享月 三

待ってる 本音の作文

そばにいるよ④

人脈記

jinmyaku@asahi.com



制野俊弘さん

宮城県東松島市にある、市立鳴瀬第二中学校。保健体育の教師、制野俊弘(46)は、3年生の女子生徒の作文が気にかかっていた。8月末にあった運動会を振り返って書いた文章だ。

閉会式の光景を書き、この先の行事も一生懸命に取り組んでいきたい、と締めくくっていた。文章としては、まとまっている。だけど、きれいすぎやしないか？

「そんなに我慢するな」ずっと伝えたかったことを言いたくなった。

10月初旬。体育館で声をかけた。「あの作文なんだけどな。この1年半、つらいこと、あったじゃない。もし、書けるなら、そのことも書いてくれる？」

「命のリレー」。運動会には、そんな意味も込められていた。

東松島市では震災で10094人が亡くなり、29人の行方がいまもわからない。鳴瀬二中は、特に被害が大きかった野蒜海岸のすぐそばで、156人の生徒のうち、発生時にすでに下校していた3人が亡くなった。8人が親を、30人が祖父母やきょうだいを亡くした。

この子も母を失った。ずっと「ママ」と呼んできたのに、遺体が見つかったからは「お母さん」と呼ぶようになった。もう甘えていられない

い、と思ったからだという。

2年の秋から生徒会の役員をやっている、しっかりした優しい子だ。震災の1カ月後に授業を再開したときも、級友を励ます側にまわっていた。だが、何かをぐっと抑え込んでいるようで、見ていて切なくなる時があった。

母親を亡くした別の女子はほとんど食事がとれず、避難所でもつれていった。それでも思い切り泣ければ、気持ちを持ち直せるようにみえる。その子もいまはバスケットボールや駅伝に励んでいる。

制野が気がかりなのは、むしろまわりから精神的に強いと思われている子だ。震災から1年7カ月。心の奥にあるものを引き出せていないと思う子が何人もいる。

制野が作文にこだわるのは、わけがある。かつて東北の教師たちは、子どもたちに生活の貧しさをそのまま書かせた。自分を見つめ直し、暮らしを変えようとするところから考えた。「生活つづり方教育」と呼ばれるものだ。制野も矢部英寿(50)ら県内の教師と実践してきた。

震災後は特に、取り繕わず本音で書く大切さを生徒に伝えてきた。前向きな文章を読んでも、「元氣になった」と考えるのは早合点に過ぎる。それが本当の心か。ありのままの気持ちで悲しみを見つめて、はじめて一歩先へ踏み出

せると制野は思う。

鳴瀬二中は、来春限りで隣の鳴瀬一中と統合されることが決まっている。今年の運動会は、二中として開く最後の運動会だった。

閉会式の締めくくりに、保護者や地域の人に加わって風船を飛ばした。赤、白、緑、黄……。200個の風船が風に乗って、青い空に消えていくのを見守った。

「この風船を飛ばしたら終わってしまう気がします。ですので、みんなが飛ばした後に遅れて風船を飛ばしました」。制野が作文の書き直しを持ちかけた女子は、最初の文章でそうつぶづっている。

小さな学校だからこそ、子どもたちの変化を日々感じとれる。声をかけたのも、今なら自分の気持ちと向き合えると思ったからだ。

その子は「大丈夫です。書けます」と言った。次の日、「すぐ書かなくてもいいですか」と聞きにきた。「ゆっくり書いて」と制野は答えた。放課後、鳴瀬二中では教師たちが土手にあがり、スクーターバスに乗り込む生徒を見送る。6割が仮設住宅や借り上げ住宅から通い、片道1時間以上かかる子もいる。

みんな今日もよく頑張ったな。もつと泣いていい。もつと甘えていいんだよ。遠ざかるバスに手を振りながら、制野は毎日、心の中で呼びかけている。(佐々波幸子)